

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 19 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370056

研究課題名(和文) インド聖典解釈学派における寛容の実際の研究

研究課題名(英文) A Study of the Motive behind the Tolerance in the Indian Exegetic School

研究代表者

吉水 清孝 (Yoshimizu, Kiyotaka)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：20271835

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：インドの宗教は寛容ないし包括主義的傾向が強いと一般に言われているが、ミーマーンサー学派は聖典ヴェーダの教説を尊重しない宗教に対して極めて不寛容である。グプタ王朝後の時代、新興の国王たちによる経済援助をめぐって、地域のヴェーダ諸流派の間でせめぎあいが高まり、メジャー流派がマイナー流派を圧迫する事態が起きていた。このためクマーリラは、どの流派のヴェーダも対等の権威をもつことから、他流派に対して寛容に接するべきだと力説した。しかしヴェーダ流派内部での寛容は外部に対する不寛容と表裏一体であり、クマーリラは仏教をバラモン諸流派に共通の敵に仕立てるため、社会生活の中での異端宗教として徹底した批判を行った。

研究成果の概要(英文)：Whereas the tendency of tolerance or inclusivism is generally said to be strong in Indian religions, the Miimamsaa school is very intolerant to a religion which does not respect the teachings of the revealed scripture, the Veda. Among the Brahmin groups of different Vedic branches in the post Gupta era, the contention for the financial aids by the newly flourishing kings increased, and the situation where a major branch puts pressure on a minor branch occurred. For this reason, Kumarila emphasized that one should be tolerant to other Vedic branches because every branch has been transmitting a Vedic text of equal authority. However, the tolerance within Brahmin groups was inseparable from the intolerance to outsiders, and Kumarila made a thorough criticism of Buddhism as a heretic religion in the real society in order to make Buddhism an enemy common to the Brahmin groups of all Vedic branches.

研究分野：印度哲学・仏教学

キーワード：寛容 不寛容 クマーリラ ミーマーンサー ヴェーダ 仏教

### 1. 研究開始当初の背景

冷戦終結後のイスラム社会と欧米との政治的緊張が社会での宗教的価値観の対立を増幅しているが、この対立には、近年の欧米社会でのムスリム移民の増加と、彼らによって職を奪われたと感ずる欧米人低所得者層による差別的な発言と行動が重大な要因となっている。宗教的ないし文化的な不寛容には、実利的な面で自分達の権利が侵害されたと思う意識が背景にある。いずれの宗教の神も同じ一つの宇宙的原理を起源とするというインドの一元論的思想には、西欧や中東の一神教には見られない寛容の精神があるという主張が度々宣揚されてきた。しかし他方、この一元論的思想は、ヴィシュヌ神の化身の神話に顕著なように、実は自らの神を絶対者として他宗教の神をその下に従属させた「包括主義」(Inclusivism)であって、寛容の思想とは言えないとする見方を P. Hacker が提起して以来、ヒンドゥー教研究では、宗教的言説の背後で実利的配慮により自派と他派とのどのような序列化が為されているかに注意することが必要になっている。

それでは所謂「インド哲学」と呼ばれる諸学派では、他者への寛容ないし不寛容についていかに論じているかを見ようとするならば、ほとんどの思想家たちがこの問題には関心を払っていないことに気付かされる。これはウパニシャッドから叙事詩にかけての時代に確立した「人は欲望により苦に満ちた輪廻を繰り返しており、欲望を完全に克服することで輪廻から解脱し寂靜を得る。」という人生観が諸学派で当然のこととして採用され、実践論では欲望克服による自己の解脱を第一目標とし、この価値観に立脚しない立場の者を度外視しているためであると言える。しかしながらパラモン哲学学派において、この人生観の画一化と「他者の不在」を免れている例外が聖典解釈学を専門とするミーマーンサー学派である。ミーマーンサー学派はヴェーダ祭式文献の解釈法の整備を任務とする保守的傾向の強い学派であるが、その強い保守性の故にこそ、他のパラモン学派と出家諸教団を、人生観を異にする他者として意識せざるを得なかった。ミーマーンサー学派は、抽象的な他者一般を想定して寛容の単なる理想論を掲げるのではなく、彼らの周囲にいた現実の様々な他者集団のそれぞれに対し、寛容・不寛容のいずれの態度で臨むべきかを考えたのである。そこで、ミーマーンサー学派の寛容と不寛容が、古代から中世へと移行しつつある社会情勢とどのように結びついているかを解明すれば、当時のパラモン・コミュニティのなかで、以前には聖典解釈の技術家集団であったミーマーンサー学派に、思想家集団としてどのような役割が期待されるようになったかを具体的に明らかにできるとの見通しを得た。

### 2. 研究の目的

クマーリラは祭式文献解釈学のみならず、文法学、論理学、法典など様々な学問への深い造詣と、哲学諸分野における独創的な理論構築によって、インドの思想家の中でもひとときわ秀でた人物であり、対立する他の哲学学派においても問題設定の枠組みに強い影響力を及ぼし続けた。彼の思想が多方面で大きな影響を保ち続けたのには、個人的天才によるのみならず、社会的要因もまたあったはずである。本研究は、文献による思想研究を歴史研究と関連付けることにより、クマーリラが、自分の置かれた時代状況に合わせてどのように自己と現実の多様な他者を関係づけているかを解明し、さらに仏教とパラモン哲学学派間の理論対立の激化と、ヴェーダ祭式が一般社会では廃れているにも拘らず有力哲学学派としてミーマーンサー学派が台頭したという、6世紀から顕在化するインド思想史の二大現象の社会的背景を明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究の方法

ミーマーンサーという一つの思想運動にも、その捉え方によって三つの側面を析出することができ、その側面ごとに学派が対峙していた他者が異なるので、ミーマーンサーでの寛容及び不寛容に関する他者意識を三つの角度から個別に解明する。(1) 保守的正統派としての、異端宗教の代表である仏教に対する不寛容の研究。(2) 世俗共同体を重んずる立場での、個人の解脱を希求するヴェーダータ学派に対する寛容と不寛容の研究。(3) 聖典解釈学としての、聖典解釈の主要対象ではないサーマヴェーダの流派に対する寛容の研究。研究の中心とするテキストはクマーリラの主著『原理評釈』(Tantravārtika) である。

特に(1)について、研究代表者は平成22-24年度科学研究費補助金基盤研究(C)マヌ法典註釈における法源論の研究—聖典解釈学との関係を中心に—によって、この箇所に対する Medhātithi 作『マヌ法典』註での長大な註釈の梗概を作成し、さらにそれがクマーリラ作『原理評釈』の第1巻第3章で詳論される法源論とどう対応するかを研究していた。そこで本研究では、クマーリラがこれら4つの法源それぞれに関して、異端宗教の代表としての仏教をどのように批判しているかを主に解明することとした。

### 4. 研究成果

図書 『クマーリラによる「宗教としての仏教」批判—法源論の見地から—』RINDAS ワーキングペーパーシリーズ 25 (学会発表の成果) は、論文 “Kumārila’s Criticism of Buddhism as a Religious Movement in His Views on the Sources of Dharma”の内容を詳論するとともに、ヴェーダの流派についての自身の見解と『マヌ法典』の法源論を、クマーリ

ラが仏教批判のためにどう応用したかを追加し、さらにクマーリラの仏教批判に関する仏教とヒンドゥー教双方での伝説、およびクマーリラの仏教批判の背景を成す時代背景についての考察を補足したものである。

クマーリラは『マヌ法典』のほぼ全ての章から、合計 20 以上の詩節を引用しており、『マヌ法典』を極めて高く評価している。『マヌ法典』は第 2 章のはじめにおいて、理法(ダルマ)を認識する根拠、即ち善悪の判断基準として、啓示聖典(śruti, Veda)、記憶聖典(smṛti, 成文法)、善良な人々の慣行(sadācāra, 慣習法)、および自己の満足(ātmatuṣṭi)という四つの法源(dharmamūla)を挙げている。三宝に帰依する仏教徒にとって、ブッダは真理の体現者として信仰の対象であり、ブッダの言葉である経典と戒律は思想と生活の指針であり、徳の高い出家修行者の振る舞いは同時代の人々の模範であり、さらにブッダの遺言により、ブッダが説いたダルマと共に常に自分の知性を頼りに物事を判断して「自己を鳥として行動せよ」(自燈明)と各人が求められているのだが、クマーリラに言わせると、これらはいずれも『マヌ法典』の説く四法源により斥けられるべきだということになるのである。

6 世紀以降、仏教とバラモン教学との教義上の論争が以前よりも格段に先鋭化していくが、このインド思想における新段階で何が起きていたのかを理解するためには、哲学理論の論議応酬の過程を個別に辿ることのみならず、背景となる当時の社会状況、特に宗教者と経済的援助者との関係およびバラモン社会内部の事情が、グプタ時代以降どのようになったのかを理解する必要がある。その一端として本書では、クマーリラが『原理評釈』第 1 巻第 3 章で、『マヌ法典』が挙げる四つの法源の見地から、社会における宗教としての仏教をどのように批判しているかを検討した。本書の結論は、下記の六点にまとめることが出来よう。

1. 保守的バラモン学者の立場では、個人から見るとより遠くにある法源がより高い権威をもつ。ヴェーダの権威は有限な人知でもって積極的には証明出来ないと認めたとうえで、ヴェーダのマントラを誦読してみれば、誰もそれが人間技で出来上がったものだとは思えないだろうと論じた。また法典は、その作者が、先に誰かから聴取し記憶(smṛ)していたヴェーダを、後で思い出し、それに従って編纂しているから、「記憶聖典」(smṛti)として権威をもつとした。ただしヴェーダであれ法典であれ、一般人が聖典を理解するには、専門的訓練を積んだ「学識者」(śiṣṭa)による判断が必要であると考えた。

2. クマーリラが活動していた時代と地域のバラモン社会には、「一つのヴェーダ部門にはメジャーなヴェーダ流派が一つあればよく、マイナーなヴェーダ流派は消滅して構わない。」という意見があった。このような

ヴェーダ流派の globalisation の動きに対してクマーリラは、ヴェーダの諸流派は互いに平等であり、弱小のヴェーダ流派もそれぞれ完全なヴェーダ聖典を伝承しているのであり、人は自派以外の流派に対して寛容に接すべきだと力説した。このためクマーリラは、ヴェーダに典拠の見られない法典規定に関して、その典拠は他所の何れかのヴェーダ流派が現在まで伝えている聖典の中にあるはずだという「典拠散在説」を唱えた。しかしながらクマーリラはその裏返しとして、ヴェーダの価値観に背く異端宗教に対しては極めて不寛容に臨んだ。仏教教団は、開祖が非バラモンであり、信者の大多数は非アーリア人であり、遺骨を納めた仏塔を建て参拝者から布施をとるなどのヴェーダが認めていない布教手段をとり、さらに個人が置かれた状況ごとに運用が異なるはずの「不殺生」などの理法(dharma)を一律に普遍化する点で、ヴェーダの伝統に矛盾(virodha)していると批判した。クマーリラにおいて、寛容と不寛容は表裏一体である。

3. クマーリラは保守的バラモンとして、慣習法を可能な限り成文法に従属させようとした。スムリティすなわち成文法と慣行が対立する場合、一見、現実の慣行の方が、その昔に成文化されて伝承されてきた法典よりも優越するようと思われるかもしれないが、実は法典の方が、信頼できる作者の名を冠して文書化されているので、匿名の人々の慣行よりも優越すると断言した。ヴェーダないしヴェーダに基づく学問を長年修めてきた学識者は、内面に形成力(samskāra)を蓄えており、その働きによって、おのずからヴェーダに沿って自己を抑制できるので、その自発的な行動が、人々から慣習法として認知されるようになる。しかし個人的な好き嫌いは人により千差万別であるから、「自己の満足」を無制限に法源として認めるなら、それは自分勝手な単なる自己満足となり、物事の善悪を決める判断基準に客観性・公共性が失われてしまう。クマーリラから見れば、個人に先立つ社会集団の維持を図るヒンドゥー法思想に則り、観察と論理による検証を重視して理法(dharma)を一律に普遍化する仏教の立場は、法源のうちでは最も優先順位が低い「自己の満足」(ātmatuṣṭi)の濫用である。

4. クマーリラの仏教批判は、多分に誹謗中傷の面があるにせよ、仏教教団が階級社会で抑圧されていた非アーリアの人々に布教していたことの裏づけになる。ただしクマーリラは、大乘仏典が賛美する「菩薩の利他行による救済」は、墮落した時代に相応しく劣化した大衆に「易行」により迎合して名誉と実利を稼ぐための出家教団による戦略であると批判した。また布教の媒体となる言語についても、あらゆる言語のうち語の意味を直接に表示できる「正しい言葉」(sādhuśabda)はサンスクリット語のみであるが、民衆に迎合する仏教などの出家教団の聖典には、辺鄙

な地方の、具体的には「マガダ地方や南方」の俗語で書かれたものが数多くあり、またサンスクリット語のつもりで書いた著作のうちには、不正規の語形がしばしば見られると指摘した。

5. 中世初期の時代にはバラモンたちが、民間宗教の神話を体系化し宗教儀礼を整備することで民衆への影響力強化を本格化した。クマーリラはそれに反対せず寧ろ賛同した。即ち、彼自身の周囲で現に行われていた民間行事に関して、ヴェーダや法典のなかに、utsava, mahas 等の語で民間の祭礼に言及する文言が僅かであれ存在することを根拠に、一括してそれら民間行事は、学識者が関わっている限り正しい慣習であると追認している。クマーリラから見れば、先行して民間で布教し成果を上げていた仏教教団は甚だ目障りであった。

6. クマーリラが、インド思想史上それまでにない辛辣な口調で仏教を糾弾し、目の敵とした動機として、グプタ朝後の時代に入って、新興の国王たちがバラモンを宮廷司祭や種々の顧問に任じて盛んに寄進をおこない、それをめぐって地域のヴェーダ諸流派の間でせめぎあいが高まったので、バラモンどうしの不和を鎮め協調を保つために、バラモン社会の外部にバラモンにとっての共通の敵を作り出す必要を強く感じたということがあったのではないだろうか。特に仏教教団ではバラモン出身者が思想家として活躍しており、クマーリラから見れば、彼らはバラモン社会の謂わば裏切り者であるから、この「共通の敵」とするのには仏教は最適であっただろう。集団の内部に対立が兆してきて将来的危機が予測されるときに、言論によって、敵意の対象を外部に転じて集団の結束を図ろうとすることは、歴史上また現代に至るまで、多くの社会集団と国家において繰り返されてきた事態でもある。

以上の他に、本稿の序論では、クマーリラは著作において仏教論理学者ダルマキールティ(600—660頃)の影響を何も受けておらず、従ってクマーリラの年代は560—620年頃とみられるとする新しい見通しを提示した。クマーリラは晩年の著『浩瀚註解』(*Brhāṭṭikā*)において、二項間で論理的条件関係が成立するには、一方が他方により存在の面で「制約」(*niyama*)されていることが必要だと述べており、これをクマーリラが晩年にダルマキールティから影響を受けたためとみる E. Frauwallner の説がこれまで一般に承認されていたが、本研究代表者は別の論文、“Reconsidering the fragment of the *Brhāṭṭikā* on inseparable connection (*avinābhāva*), *Pramāṇa-kīrtiḥ, Papers Dedicated to Ernst Steinkellner on the Occasion of his 70th Birthday*, 2007, pp.1079-1103 及び“Reconsidering the fragment of the *Brhāṭṭikā* on restriction (*niyama*), *Proceedings of the Fourth International Dharmakīrti Conference*, 2011, pp. 507-521 において、『浩瀚

註解』以前の著作においてクマーリラは既に「論理的条件関係成立のための存在論的制約」という考えを抱いていたので Frauwallner 説には根拠がないことを論じた。一方、片岡啓は『詩節評釈』と『浩瀚註解』両方にみられる「ブッダが全知者 (*sarvajña*) であることの批判」を比較して、Frauwallner 説を擁護した。片岡は、クマーリラが「ブッダは欲望をもたないから人への教示はあり得ない」とする『詩節評釈』での全知者批判を書き終えたのち、ダルマキールティによる反論を知り、『浩瀚註解』では「ブッダは瞑想しているので人への教示はあり得ない」という別の観点から全知者批判をしたと解釈した。しかし本研究代表者は、『詩節評釈』での全知者批判の観点は全て『浩瀚註解』に受け継がれており、またクマーリラは『浩瀚註解』で同じく、既に『詩節評釈』において、「釈尊は開悟した後も涅槃に入るまで瞑想を続け世界の全事象を観じ続けていた」という、大乘仏典の『如来秘密経』が説く「一字不説」を言質にとって、瞑想中の仏陀に教示は不可能だと論じていることを証明した(註33)。

さらに研究代表者は、クマーリラが『マヌ法典』の作者とされるマヌの権威とブッダの異端性をどのように根拠づけるかについて(本論文 II.3)、およびクマーリラが『原理評釈』でおこなった諸学問の分類をダルマキールティがヴェーダ批判に応用したか否かについて(註129)、それぞれ片岡啓が提起した解釈を誤りとして批判し斥けた。

論文 “Eli Franco (ed.), *Periodization and Historiography of Indian Philosophy*, Publications of the De Nobili Research Library 37” は、Eli Franco ライプツィヒ大学教授が第14回国際サンスクリット会議(京都)で開いたパネルの論文集に対する書評である。Franco 教授は本論集において、インド思想の各分野の専門家に当該分野での時代区分をどのように考えるかについて論文を執筆依頼し、さらに近現代での代表的なインド哲学史観を取り上げ、特にアーリア的哲学思想とヒンドゥー的宗教思想を対立させる E. Frauwallner の哲学史観に、アーリア人優位主義が反映しているとの指摘を行った。

これに対し本研究代表者は、Frauwallner の哲学史観の問題はむしろ、Frauwallner が「サーンキヤ思想は叙事詩 *Mahābhārata* の第12巻「寂静の巻」(*Śāntiparvan*)の最終部を成す解脱法品 (*Mokṣadharmā*)における根本原質 (*prakṛti*)の体系内導入をもって完成する」と主張するにもかかわらず、サーンキヤ思想を純粹のアーリア哲学の典型としている点にあると指摘した。研究代表者の見るところでは、精神性を全くもたない純粋物質としての根本原質 (*prakṛti*) はヴェーダ文献とその思想には見いだせず、アーリア世界外部からの影響によるものと推測できる。つまり、完成したサーンキヤ思想において、のちにヒンドゥー的「寛容」の別名として顕著になる包

括主義 (Inclusivism) が既に始まっていると考えられるのである。

さらに, Franco が M. Biarreau によるインド思想全体の時代区分は文化人類学者 Louis Dumont からの影響が大きいと指摘したことを受けて, 本研究代表者は, 欧米でも世論および研究者の大勢はアーリア人優位主義に批判的である以上, インド思想研究における先入見の再検討という点では, 現時点では Frauwallner よりも, むしろいまだ強く残る Dumont の影響に注意すべきではないかと問題提起を行った。Dumont は人間観として集団主義と個人主義を明確に区別し, 西欧世界と違いインドにおいて個人主義は出家教団の中にしか見られず, 世俗社会においては大家族制とカースト制に縛られて, 個人意識は育たないと断じた。しかし近年研究が盛んになっている, タントリズム, 生前解脱 (jīvanmukti), そして知識手段 (pramāṇa) の理論は, 所与の社会集団に制約されない, 個人がもつ様々な能力への関心が世俗社会の中でも, グプタ朝滅亡後の中世初期以降高まってきたことの現われとして捉え直すことが出来るだろう。Dumont のカースト理論は, 現実社会の政治的・経済的要因を軽視し, パラモンが著した文献に過度に依存していると人類学者から批判されているが, パラモンの文献に対する Dumont の読み方自体に偏向があると見るべきであろう。

論文「ミーマーンサーにおける Yajurveda 中心主義について」においては, ヤジュルヴェーダ, 即ち祭式の初めから終わりまで, 祭詞 (yajus) を吟きつつ身体を動かして実務儀礼と進行役を務める祭官のヴェーダの解釈学として成立したミーマーンサーが, 祭式に関わる他のヴェーダ, すなわちリグヴェーダとサーマヴェーダとをどのように評価するかを考察した。ミーマーンサーでは専らヤジュルヴェーダのテキストからの引用の解釈を論題とするけれども, ソーマ祭におけるサーマヴェーダ詠唱 (stotra) とリグヴェーダ朗誦 (śāstra) も, ヤジュルヴェーダ祭官による祭火への供物献供と同様, 果報獲得のために行う主要儀礼として認める。しかしながら他面では, ヤジュルヴェーダに引用されたリグヴェーダ詩節の読誦法をはじめ, 幾つもの点で, 祭式においてヤジュルヴェーダが他のヴェーダを支配していると思われており, ここにヴェーダ文化内部での包括主義を見て取ることが出来るだろう。

論文 “Distinguishing Deities: A Contextual Analysis in Mīmāṃsā”においては, サーマヴェーダのマントラの中で呼びかけられている神格と, ヤジュルヴェーダの規定文がそのマントラ詠唱の捧げ先として指定している神格とに不一致がある場合には, 後者の神格指定の方が正しいとするヤジュルヴェーダ優先の解釈法を論ずる中で, クマーリラはヤジュルヴェーダ優先の根拠を, 規定文が組み込まれている文脈に求めていることを論じた。

クマーリラはこれによって, 祭式文献解釈における語用論的解釈を独自に発展させたのである。

さらにミーマーンサーとヴェーダーンタとの連続性の一面として, ヴェーダーンタでの絶対者の呼称のひとつの「最高我」 (paramātman) に関する思想が, 古代のウパニシャッドから中世のヴェーダーンタ学者に至るまで, ミーマーンサーで強調する行為の継続的遂行と密接にかかわり続けていたことを解明して, 6 月末にバンコクで開かれた第 16 回国際サンスクリット会議 (World Sanskrit Conference) において研究発表を行い (学会発表), 年末には, 会議の紀要に載せる論文を完成し提出した。瞑想は身体を動かさないにもかかわらず行為の一種であるとヴェーダーンタで考えることは従来より指摘されていたが, brahman, īśvara と並びヴェーダーンタで頻繁に同じ絶対者の呼称となる paramātman は, 個人が瞑想により到達すべき対象として常に考えられていたことが, 本発表により明らかになった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

吉水清孝, “Kumārila’s Criticism of Buddhism as a Religious Movement in His Views on the Sources of Dharma,” Akira Saito (ed.), *Buddhism and Debate: The Development of Mahāyāna Buddhism and Its Background in Terms of Religio-Philosophical History*, *Acta Asiatica* 108, 査読有り, 2015, pp. 43–62.

吉水清孝, “Eli Franco (ed.), *Periodization and Historiography of Indian Philosophy*, Publications of the De Nobili Research Library 37,” *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism (Sambhāṣā)* 32, 査読有り, 2015, pp. 60–71.

吉水清孝, “Distinguishing Deities: A Contextual Analysis in Mīmāṃsā,” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 62(3), 査読有り, 2014, pp.1124–1132.

吉水清孝, 「ミーマーンサーにおける Yajurveda 中心主義について」『論集』(印度学宗教学会) 40, 査読有り, 2013, pp. 167–178.

[学会発表](計 13 件)

吉水清孝, 「udgithavidyā 再考—ミーマーンサーとヴェーダーンタの関係性を再検討するための一視点—」, 「ブラフマニズムとヒンドウイズム」準備研究会, 2016 年 1 月 22 日, 京都大学人文科学研究所.

吉水清孝, “Some remarks on the Buddha and Buddhism in the works of Kumārila, Bhāviveka and Candrakīrti,” International Workshop on Bhāviveka vs. Candrakīrti, 2015 年 8 月 26 日,

東京大学.  
吉水清孝, “Paramātman and the Jñānakarma-samuccaya-vāda,” 16th World Sanskrit Conference, 2015 年 6 月 29 日, Bangkok, Thailand.

吉水清孝, 「クマーリラによる「宗教としての仏教」批判—法源論の見地から—」2014 年度第 5 回 RINDAS 伝統思想研究会, 2014 年 12 月 19 日, 龍谷大学現代インド研究センター, 京都 (招待講演).

吉水清孝, “Another look at *avinābhāva* and *niyama* in Kumārila’s exegetic works,” 5th International Dharmakīrti Conference, 2014 年 8 月 29 日, Heidelberg, Germany.

吉水清孝, “Kumārila’s Criticism of Buddhism as a Religious Movement in his Views on the Sources of *dharmā*,” 2014 年 9 月 1 日, Institut für Kultur- und Geistesgeschichte Asiens, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Wien, Austria.

吉水清孝, “From Proper Noun to General Term in Dignāga’s Theory of Apoha,” Seminar: Semantics or Pragmatics?, 2014 年 9 月 2 日, Institut für Kultur- und Geistesgeschichte Asiens, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Wien, Austria.

吉水清孝, “From Semantics to Pragmatics in Kumārila’s Theory of Language,” Seminar: Semantics or Pragmatics?, 2014 年 9 月 3 日, Institut für Kultur- und Geistesgeschichte Asiens, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Wien, Austria.

吉水清孝, 「インド聖典解釈学における語用論的側面」印度学宗教学会第 56 回学術大会, 2014 年 5 月 31 日, 種智院大学, 京都.

吉水清孝, “Distinguishing Deities—A Contextual Analysis in Mīmāṃsā.” 6th International Vedic Workshop, 2014 年 1 月 9 日, Kozhikode, Kerala State, India.

吉水清孝, 「ミーマーンサー・ヴェーダーンタ存在論における *bhedābheda* をめぐって」日本印度学仏教学会第 64 回学術大会パネル発表 A, 2013 年 9 月 1 日, 島根県民会館, 松江.

吉水清孝, 「神格 (*devatā*) の同一性と区別についてのミーマーンサー的考察」, 日本印度学仏教学会第 64 回学術大会, 2013 年 8 月 31 日, 島根県民会館, 松江.

吉水清孝, 「ミーマーンサーにおける Yajurveda 中心主義について」, 印度学宗教学会第 55 回学術大会, 2013 年 6 月 2 日, 駒沢女子大学, 東京.

〔図書〕(計 1 件)

吉水清孝, 『クマーリラによる「宗教としての仏教」批判—法源論の見地から—』RINDAS ワーキングペーパーシリーズ 25, 2015, 龍谷大学現代インド研究センター, 72 頁.

〔その他〕

6. 研究組織

(1)研究代表者

吉水 清孝 (YOSHIMIZU, Kiyotaka)  
東北大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号: 20271835

(2)研究分担者

藤井 正人 (FUJII, Masato)  
京都大学・人文科学研究所・教授  
研究者番号: 50183926